

文化としての〈老い〉
——モダニズム女性作家が語る〈老い〉について——

手塚裕子*

A Study of 〈Age〉
〈Age〉 in the Novels of British Modernist Women Writers

Yuko TEZUKA

Abstract

One of the most dramatic changes in the 21st century might be the huge increase of the elderly population. Due to the development of medicine and the improvement of living conditions, Japan and developed Western countries face a great swelling of the older population, which is a revolution almost unprecedented in human history. Longevity is the benefit of civilization. In other words, “age” itself is civilization. In the following paper, I would like to investigate “age” in the novels of Katherine Mansfield and Virginia Woolf.

In the first chapter, some perspectives of gerontology will be introduced. Gerontology is the study of aging. In 1989, David Gutmann, a psychological gerontologist, presented the hypothesis that men acquire “feminine” qualities in later life and older women embrace aggressive masculinity. He suggested “cross-gender trade-off in psychological contents” as a natural and developmental process of character. (*Reclaimed Powers*, 24) Betty Freidan, developing Gutmann’s hypothesis, indicated that integration of masculine and feminine qualities is a possible stage of development in age; a new dimension of our humanity in age. (*The Fountain of Age*, 19)

In the second chapter, I examine Virginia Woolf’s *The Years* (1937) in order to prove the “cross-gender” hypothesis. *The Years* is a chronicle of a Victorian upper-middle class family from 1880 to the 1930’s. Eleanor Pargiter appears as a typical Victorian “Angel in the House” in 1880. As she grows old, Eleanor transcends gender, class-consciousness, and nationality. She embodies “a possible stage of development in age.”

In the third chapter, I discuss short fictions of Katherine Mansfield to study conflict between the old and the young. Most elderly women in Mansfield’s fictions are independent and they live on their own. But they feel vulnerable when ridiculed by the youth. The narrator of “the

*教授 英文学

Canary” was traumatized. She was ridiculed by young men as they called her “Scarecrow.” She ignored the ridicule, but she was very lonely. She confessed how she loved her canary. She said, “But love something one must.” This is the last message from Mansfield. One cannot live without loving something. No matter how old they are, old people want to love something, more than they want to be loved.

In conclusion, examining these works, I have clarified various aspects of age. We can be encouraged by new possibilities of cross-gender, but we will be depressed by trauma caused by the cruelty of the youth. The study of “age” has only just begun. “Age” is still an undiscovered, unknown country for us all. We have to explore more aspects of “age” in the future.

Key Words: gerontology, cross-gender, Modernism, Woolf, Mansfield

序論

21世紀、急激な医学の進歩と社会的・文化的進化によって、日本および欧米先進諸国は、未曾有の超高齢化時代を迎えた。日本女性の平均寿命は、1947年では54才だったが、2007年では86才まで伸びた。「人生80年」時代の今、私たちは定年退職後、または子育て終了後、20年から30年を生きることになった。これほど長い老いの期間は、もはや「余生」ではない。それは、成長期、生殖期につづく、人生の第3のステージである。

普通の野生動物は生殖期が終われば、死を迎える。人間のみが、文明の力によって生殖期間終了後も生きるつづけ、遺伝子の設計図では想定していなかった「老年期」というものを作り上げた。つまり、〈老い〉は文明が作ったものであり、〈老い〉自体が文化なのである。20世紀の哲学者、心理学者は文化としての〈老い〉を次のように語っている。

Simone de Beauvoir (1908–1986) は『老い』の中で、「老いは全体的に捉えることによってのみ理解しうる。それは単なる生物学的事実ではなく、文化的事実なのである」(20) と言い、Karl Jung (1875–1961) は『無意識の心理』の中で、40才を人生の正午と呼び、40才以降を人生の午後ととらえ、「人生の午後は、人生の午前に劣らず意味深い。ただ人生の午後の意味と意図は、人生の午前のそれとは全く異なるものなのである。人間には二つの目的がある。第一の目的は自然目的であり、子孫を生み、これを養い育てるのがそれで、これに更に金を儲けたり社会的地位を得たりするという仕事加わる。この目的が達成されると、別の段階が始まる。それは文化目的の段階だ」(122) と、述べている。

〈老い〉を研究する学問、ジェロントロジーは、近年、めざましい発展を続けている。本

文化としての〈老い〉

稿では、文化としての〈老い〉に焦点をあて、新しいジェロントロジーの理論をふまえながら、イギリス・モダニズムの女性作家、Katherine Mansfield (1888-1923) と Virginia Woolf (1882-1941) の作品に描かれた女性の老いを分析する。

20世紀初頭のモダニズムの時代は、さまざまな価値観や社会制度に大きな変化が生じ、この時に生まれた新しい価値観は、現代社会の原型となった。従って現代の老いを研究するためには、モダニズムの時代にさかのぼって、問題の原点を追究することが有効である。対象を女性に限定したのは、〈老い〉には、ジェンダーの問題も絡んでいることから、男性と女性では〈老い〉に対して異なる対応や問題が見られること、モダニズムの時代から顕著になった女性の社会進出、高学歴化、核家族化、非婚・晩婚化、少子化等のライフスタイルの変化が、女性の老いを大きく変えたことなどから、女性の老いが興味深い研究対象と思われるからである。

I

ジェロントロジーとは、日本語で老年学と訳され、加齢に伴うさまざまな変化を学際的に研究する新しい学問である。ジェロンとは、ギリシャ語で老人を意味し、ジェロントロジーという語は、1906年にロシアの生物学者イリヤ・メチニコフによって導入された。ジェロントロジーは、最初、医学・生物学から始まり、やがて社会学、心理学、社会心理学的研究が加わり、近年ではフェミニズムもジェロントロジーに関心を寄せている。¹ 文学をベースとしたジェロントロジーの初期の代表的な研究書としては、シモヌ・ド・ボーヴォワールが1970年に発表した『老い』がある。

ボーヴォワールの『老い』は、古今東西の文学作品から老いを読み解いた大作であるが、ボーヴォワールの〈老い〉に対する見方は否定的である。「老化を特徴づけるのは、変化のある種の形態、すなわち、不可避で不利益な変化、凋落である。」(17)「老人は社会からみれば、猶予期間中の死者にすぎない。」(253) ボーヴォワールに限らず、1980年代まで、ジェロントロジーは、〈老い〉を否定的に捉えるのが主流だった。

生物学者も〈老い〉を否定的に見ていた。老化の原因は遺伝子にプログラムされているとする「老化プログラム説」や、老いは避けられない宿命であるとする「老化宿命論」が長い間、支持されていた。ところが1980年代に入ってから、生物学者たちは、宿命論やプログラム説を覆し、「老化は必然でも必要でもない」という仮説を発表し、〈老い〉をネガティブからポジティブに捉えようとするパラダイムの転換が起こった。²

そして、1989年、老年心理学者であり、文化人類学者でもある David Gutmann (1925-?) は、

Reclaimed Powers を発表した。従来の老年心理学では、男性は年老いて、男らしい攻撃能力が低下してくると、自我の中に空白が生じ、その空白の中に鬱が侵入すると考えられてきたが、ガットマンはこれを否定して、“When men use up their masculine aggression, they are freed to discover a potential resource, their hitherto unclaimed ‘feminine’ substance.” (97) と主張した。

ガットマンは都市に住むアメリカ人だけでなく、ナバホ・インディアンやマヤ族など、さまざまな文化における〈老い〉を調査した結果、原始時代からの本能として人間は、子孫を生み育てる期間、男には戦士としての攻撃性、女には母としての優しさが要求されていたが、子育てを終え、生殖期間を終えた時、男女とも今まで抑えていた別の能力、すなわち、男は女らしさを、女は男らしさを発揮するようになり、クロス・ジェンダーが起こることを発見した。

The hypothesis held that men acquire, in later life, “softer” qualities of affect and cognition, which are at odds with the previous hard-edged “masculine” definition of their personalities. In this seemingly developmental advance, the older man seems to gain a sensitivity and tenderness previously lacking in his psychological makeup. Conversely, the inner life of older women, as portrayed in responses to projective tests, appears to move on the opposite tack, as they embrace the aggressive masculinity that the older men are relinquishing. This cross-gender trade-off in psychological contents suggested a natural process, possibly developmental in character. (24)

ガットマンの仮説の斬新な点は、老いた男性が女性的になっていくことを、恥や衰退としてではなく、自然なプロセスとして、老年期における新しい人格の発達として捉えた点である。これは、〈老い〉に関するパラダイム・シフトであるだけでなく、男らしさを女らしさより、上位とするジェンダー・バイアスを覆したという点で、画期的である。老年期に入って次第に女らしくなっていくことを「恥」と考える男性は鬱になるが、それを人格の発展と捉えれば、新しい地平が開ける。ガットマンの文化人類学的調査によれば、クロスジェンダーが顕著に現れるのは、逆説的ではあるが、女性的に育てられた男性より、むしろ戦士として厳しく鍛えられた男性の方である。たとえばフィジー島の部族では、若い時に勇敢に戦った戦士は、老いてからは家庭に入り、女性のように暮すことを自然の営みとして受け入れている。

ガットマンのクロスジェンダーの仮説を受けて、1993年、*The Feminine Mystique* (1963) の著者、Betty Friedan (1921-2006) は、*The Fountain of Age* を発表する。「女らしさの神話」と戦ってきたフリーダンは、60才を過ぎた頃から、「老いの神話」との戦いを始める。「老いの神話」

文化としての〈古い〉

とは、科学的根拠もないのに、一律に高齢者を無能と決めつける偏見、高齢者を依存的で介護を必要とする憐れな弱者とみなす差別意識、老いを必要以上に恐れる恐怖症（ジェロフォビア）、老いを拒否して若さの価値に固執する神経症などを総合的に指す。

フリーダンは、〈古い〉を「凋落」としてではなく、「さらに成長し続ける新しいステージ」とみなし、ガットマンと同様、「女性は伝統的な女性の役割から解放された時、以前は男性から得ようとした強さを自らの内に発見し」、「男性はかつて女性に求めていた感受性を自らのうちに発見し発達させることができ」、「男らしさと女らしさの特質の統合が老年期における発達段階のひとつになりうるのではないか」という仮説を提唱した。

Is integration of our masculine and feminine qualities a possible stage of development in age? And finally, might a new dimension of our humanity emerge with age? (19)

「この長寿命化は生殖に適応していた性別役割分業を乗り越えるよう、私たちに命じている」(17) かのようフリーダンは感じる。そして彼女は、生殖可能期間が終わり、生物学的役割から解放された時、女性は“womanhood”でなく、男性も“manhood”でなく、その人らしさ“personhood”(186)として個性を伸ばし、社会規範に縛られず創造的に生きていく可能性が生まれることを示唆する。

次にクロスジェンダー、老年期における新しい発達の可能性について考えるために、Virginia Woolfの*The Years*(1937)を読む。

II

ヴァージニア・ウルフは、1882年、ロンドンに生まれ、ヴィクトリア朝の社会規範の下で厳しく育てられる。1904年、ウルフ22才の時、父が死に、その後、彼女は解放されたように、作家として次々に作品を発表する。1928年、ウルフ46才の時、イギリスは婦人参政権を獲得する。ウルフの人生は、女性解放運動の軌跡と一致していた。*The Years*は、1937年、ウルフ55才の時に出版される。

*The Years*は、ヴィクトリア朝時代の「1880年」から1937年の「現代」に至る、およそ50年間のパジター家の人々の人生を描く大河小説である。

まず、第1章「1880年」では、パジター家の母、パジター夫人は瀕死の病の床に臥せている。大家族を切り盛りしてきた夫人は、病に倒れても家庭の中で夫や子供たちに見守られ、

住み込みの看護師から手厚い看護を受けている。大家族制度は、若い時には女性に忍従を強いたが、年老いた時には、子や孫に囲まれた賑やかな老後を約束していた。それは孤独な老いに直面しないための安全装置であった。大家族制度の呪縛と恩恵の両方を受けながら、パジター夫人は、死の床でも親戚の誕生日にメッセージを贈ることやテーブルクロス洗濯代を心配する。

夫のパジター大佐は、厳格な父親として、大家族の頂点に君臨する家父長である。大佐は、若い時に大英帝国のための戦争で戦い、指を二本失っているが、そのために、一層近寄り難い威厳を備えていた。しかし大佐は、こっそり貧民街で情婦を囲っていた。妻や娘たちには厳しく貞節を守らせながら、自分は情婦を囲うという、モラルのダブルスタンダードもヴィクトリア朝の紳士らしいといえる。

このパジター家には3男4女がいる。男の子はパブリックスクールから大学へ進学するように、女の子は家庭の天使となるように、男女別々の基準で、ヴィクトリア朝式に教育されている。22才の長女エレナは、病気の母に代わって、家を切り盛りし、父親であるパジター大佐の不機嫌を慰める典型的な家庭の天使である。

次の章「1891年」では、弟や妹たちは独立し、エレナは父親の世話をするため、独身のまま家に残っている。気難しかった父も、年とともに穏やかになり、クロスジェンダーが起きて、エレナの方が、今では一家の主人になっている。借家の管理もエレナの仕事だが、使用人がお金をごまかしていることが発覚した時、エレナは「大佐の娘」としての威厳に満ちた態度で容赦なく使用人を叱り飛ばす。ここでは、エレナの強い階級意識が露見する。その帰り道、乗合馬車でエレナに足を踏まれた男は、彼女の服装や態度から見て、見るからに典型的な“Victorian spinster”であると思う。この章までのエレナは、その考え方もモラルも外見も、典型的なヴィクトリア朝の女性であることが明らかである。

ところが、「1911年」の章になると、ヴィクトリア朝の権化のようだったエレナに変化が起こる。父の死後、エレナは屋敷を売却し、家政婦に暇を出し、生まれて初めて彼女は「家」から解放される。この時エレナは55才、*The Years* 出版当時のウルフと同じ年齢になっていた。父の死までヴィクトリア朝の規範通りに生きてきたエレナは、突如として反逆を始める。まず初めに、単身スペイン旅行に出かけ、その後、弟の妻シーリアの実家に招待され、イングランドの田舎町を訪れる。その町では、白髪の老婦人たちは、庭の草花の手入れをしたり、自転車で訪問する牧師とお茶を楽しんでいた。それは典型的なイギリスの老婦人の生活だったが、エレナは、そのような生活には魅力を感じられなかった。

その家には弟の学生時代の友人、サー・ホワットニーも招待されていた。ホワットニーは、

高級官僚として植民地インドを統治した後、引退していた。彼が独身で、しかも若い時にエレナに恋していたことを知ったシーリアは、エレナとホワットニーの結婚を提案する。サーの称号をもつ退役した高級官僚との結婚は、「大佐の娘」であるエレナにとって、理想的な結婚であると思われたが、エレナは彼との結婚を断る。“… his life was over; hers was beginning. No, I don't mean to take another house, not another house, …” (185)

家庭的な女性だと誰からも思われていたエレナの、どこにそれほどの強い反逆心が潜んでいたのか、父の死を境に、エレナは社会規範や固定観念を破り、お手本のない新しい人生を自由に生き始める。時代は20世紀に入り、交通手段も発達し、女性ひとりでも安全に外国旅行ができるようになり、エレナはギリシャ、ローマ、インドを旅する。外国の強い陽射しを浴びて、エレナの顔は浅黒く日焼けし、髪は白髪となったが、キラキラ輝く瞳が若々しい印象を与え、外見だけでは、国籍も年齢も階級も判断できなくなる。エレナはジェンダーだけでなく、階級や国籍をも超えてゆく。

最後の章「現代」では、老いたパジター家の人々は、デイリアのパーティーで再会する。末娘のローズは、幼い頃、男の子を優遇する男女差別に怒り、兄のマーティンと喧嘩ばかりしていた。ローズは婦人参政権運動に身を投じ、投獄にも屈せず、第一次世界大戦に志願して活躍し、勲章を授与されるという男らしい生涯をおくり、今では先祖のパジター騎兵隊のパジター隊長の肖像画そっくりの風貌をたたえている。一方、マーティンは仕事よりも恋に生きるという、女性らしい生涯をおくった。二人は今、昔の確執を乗り越え、仲よく昔話に興じる。エレナの従妹、キティは、娘時代は自由恋愛に憧れていたが、結局、親の勧める貴族と結婚する。恋を夢見る可憐な少女は、年齢を重ねて、威厳と力を身につけ、70代の“masculine old lady”となっていた。キティは妻として母としての役割を終えて、初めて自由を得、“How nice it is not to be young” (229) と言う。

70才を超えたエレナは、ロンドンの安いフラットで一人暮らしをしている。そのフラットには、娘時代を過ごしたエバコーン・テラスの美しさはないが、そこにはシャワー・バスがあった。エバコーン・テラスの最大の欠陥は、たった一つの浴室を大家族で共有している不便さだった。エレナは失われた過去の美しさより、シャワー・バスの快適さ³を慈しむ。一人暮らしのエレナのフラットには、いつも、様々な人々が入り出て、にぎやかに議論している。こうしてエレナは、肉親の家族にしがみつからない生き方を身をもって示す。ベティ・フリーダンは、「家族以外の人とのつながり“bonds beyond family”を維持したり、築いたりする能力は、幸福な老年期を迎えるうえで、家族の絆以上に重要な要因」(91)となると述べているが、まさしくエレナは幸福な老年期を生きている。エレナの幸福は、彼女自身の真摯な生き方による

ものだが、それ以上に重要なのは、風変わりな老女エレナを暖かく見守り、敬意を表する若い世代の存在である。

「老いの神話」に囚われているのは、高齢者だけではない。むしろ若い人々の方が、高齢だという理由だけで、高齢者を嘲笑したり、憐れんだり、差別したり、或いは、高齢者を老人のステレオタイプにはめ込み、冒険する高齢者を許さず、恐ろしい「老いの神話」の中に高齢者を追い込むことが、多々あるのではないだろうか。

ベティ・フリーダン は、50才になってからダンスを始めたが、ダンスフロアでステップを踏んでいると、若い人たちがフリーダンを見て笑っているのに気づき、不愉快な気分になったことがある。若い人の嘲笑は、高齢者を不愉快にするだけでなく、時には、深い心の傷、トラウマを負わせることがある。

子供時代の記憶は誰にもあるので、子供時代のトラウマは想像することができるが、老いたことのない人が、高齢者のトラウマを予測するのは難しい。しかし、「老いの神話」を乗り越えようとする高齢者の前に、若い人々の嘲笑、偏見、憐れみが立ちはだかっているのは明らかである。次に Katherine Mansfield の短編から、若い世代に心を傷つけられた高齢者のトラウマについて考えてみよう。

III

キャサリン・マンスフィールドは、1923年、34才の若さで結核のため他界したので、年齢的には老人ではない。しかし、29才で咯血してからの5年間、絶え間ない咳に苦しみ、常に死の恐怖に怯え、体力は衰弱して歩けなくなり、容貌は痩せ衰えて、年よりずっと老けて見えるようになり、事実上の老いを経験することになる。暦年齢より、はるかに若い年齢で老いを迎えたマンスフィールドの老いは、孤独である。普通の老いの場合、自分と同世代の夫や妻、友人や兄弟姉妹も年をとるので、老いを分かち合う人がいるが、マンスフィールドの場合、夫はまだ30才だったし、60代の父親でさえ、健康に恵まれ仕事も順調だったので、死の恐怖に怯える娘の老いを理解できなかった。

マンスフィールドは、孤独な闘病生活の中で、母親のことを思い出す。母も長い闘病生活の末に亡くなったが、マンスフィールドの母は、パジター夫人と同様、家庭の中で手厚く看護されていた。母は、ヴィクトリア朝時代の女性として、多くの子を産み、大家族を切り盛りすることだけを期待され、勉強したり、仕事をして自立する自由は許されなかった。母は人生に大きな不満を抱えていたが、母は死ぬまで家族に守られていた。一方、娘のマンスフィールドは、

新しい女性として高等教育を受け、ロンドンで一人暮らしをしながら作家となり、収入を得て自立し、結婚しても夫と対等の立場を保持し、子供を持たず、モダンな結婚生活を送っていた。しかし、その自由の代償として、彼女は孤独な老いを引き受けることとなった。マンスフィールドは夫宛の手紙（1919年11月21日付）の中で、家族に囲まれていた母を羨みながらも、最後には、「でも私には仕事がある」と述べ、仕事をもつ女性の誇りを見せる。

マンスフィールドの描く高齢女性は、自伝的作品に登場する自身の祖母をモデルとしたフェアフィールド夫人を除いては、ほぼ全員が、マンスフィールド自身の姿を投影して、職業を持って自立する一人暮らしの女性である。その中から、まず“Miss Brill”（1920）に登場するミス・ブリルをとりあげてみよう。ミス・ブリルは、フランス人に英語を教えて収入を得ている。或る秋の日曜日、彼女はお気に入りの狐の襟巻を箱から出して公園に出かける。公園で他人の会話を聞くのが、彼女の最大の楽しみだった。ミス・ブリルは公園にいる見知らぬ人々の会話の断片をつなぎ合わせ、物語を作り上げていくうちに、すべての人々と理解し合えたような錯覚にとらわれ、途方もない幸福感を感じて涙ぐむ。

その時、すぐ近くのベンチに若い恋人同士の男女が現れる。恋人同士の会話を聞こうとして、ミス・ブリルは、いつもより熱心に耳をそばだてると、男女は、彼女が聞き耳をたてていることに気づいてしまう。若い女が「今はだめよ」と言って男の口づけを拒否すると、がっかりした男は、「あの馬鹿なバアサンのせいだね。何でここにいるんだろう。誰もバアサンなんか必要としてないのに。バアサンは家にいればいいんだよ」と言うと、女は、「へんなのは、あの毛皮よ。まるで鱈のフライみたい」とあざ笑う。(377)二人とも小声で話していたが、耳の良いミス・ブリルはすべてを聞きいてしまう。

ミス・ブリルは、一人暮らしの暗い部屋に帰り、狐の襟巻を箱にしまう。蓋を閉める時、何かの泣き声が聞こえる。公園で感じた幸福感も他者との連帯感も、すべては消滅してしまった。ミス・ブリルは、その後もう二度と公園に行かないだろう。また罵倒されるのが怖くて、狐の襟巻もできず、トラウマをかかえたまま自宅に引きこもって、深い孤立へと自らを追い込んでいくのだろう。

若い男女の嘲笑が、高齢女性の心を鋭いナイフで突き刺し、絶望と孤独へと追い込んでいく“Miss Brill”は、非常に残酷な作品である。Margaret Drabble (1939-) は、エッセイ“Katherine Mansfield: Fifty Years On” (1973) の中で、“Miss Brill”の残酷さを指摘し、あまりの残酷さに慄いたと述懐している。⁴ Elaine Showalter (1941-) も著書 *A Literature of Their Own* (1977) の中で、マンスフィールドの作品の残酷さに言及し、ドラブルのコメントを引用している。⁵

ドラブルとシュウォルターを恐れさせた“Miss Brill”の残酷とは、若い男の「馬鹿なバアサ

ン」という一言と、若い女の「ヘンな毛皮」という嘲笑である。作品の中では、ミス・ブリルの年齢については何の記述もない。彼女の言動や生活の状態から、読者が勝手に彼女を年寄りだと思っているだけで、ミス・ブリル自身は、この時まで自分のことをおばあさんだとは思っていなかったのかもしれない。お気に入りの毛皮の襟巻も、彼女が若い頃は流行の先端だったのだろう。自分では、まだ老人ではないと思っていたのに、不意に見知らぬ人から「おばあさん」と呼ばれたり、お気に入りの洋服や化粧を流行遅れと笑われたりすることは、些細なことと言われるかもしれないが、実は、女性にとって非常に残酷な打撃となりうる。⁶

“Miss Brill”の出版から2年後、1922年7月に書かれた“The Canary”の語り手は、あの事件の後のミス・ブリルを思わせるような孤独な高齢女性である。彼女は誰もいない部屋で、カナリアの鳥籠を掛けていた壁の釘を見ながら、一人語りを始める。“The Canary”は、マンスフィールドが生前に完成させた最後の作品である。

“The Canary”の語り手は、年齢は明記されていないが、おそらく高齢の、一人暮らしの女性である。彼女は若い男の下宿人の世話をしながら、収入を得て自活している。或る時、若い下宿人が、彼女のことをカカシババアと呼んでいるのを耳にはさむが、“It doesn't matter. Not in the least. I quite understand. They are young.”(540)と受け流す。おそらく若者から嘲笑されたり罵倒されたりするのは、初めてではなかったのだろう。彼女は若い男たちのことなど無視して、カナリアとの出会いからその死まで、彼女がどれほど、彼、カナリアを愛していたかを切々と語る。“… I loved him. How I loved him! Perhaps it does not matter so very much what it is one loves in this world. But love something one must.”(539)

心理学者、Erik Erikson (1902-1994) の妻 Joan Erikson (1902-1997) は、93才の時、*The Life Cycle Completed*⁷に、「最終章：人格発達の第九段階」を書き加えたが、彼女は、何かを創造したり、誰かの世話をしているという感覚を失うことは死よりも悪いと考え、次のように述べている。“… but if one, should withdraw altogether from generativity, from creativity, from caring for and with others entirely, that would be worse than death.”(112)

“The Canary”を書いた時、マンスフィールドは他人の介助なしでは、日常生活ができないほど衰弱していた。そのような状態にあってもなお、「人は何かを愛さなければ生きていけない」と言ったマンスフィールドの言葉の持つ意味は重い。私たちは、高齢者問題というと、ケアを与えることばかり考えがちだが、たとえ要介護状態になっても、高齢者は心の中では何かを創造したり、誰かの役に立ちたいと思っているのではないだろうか。マンスフィールドは、この作品以降、新しく作品を完成させることはできなかったが、それでも死の間際まで、彼女は次の作品の構想を練っていた。

*

Virginia Woolf の *The Years* では、老いてから後、社会規範から解放され、新しい人格のさらなる発達と冒険の可能性が示され、Katherine Mansfield の短編では、老年期のトラウマ、高齢者の心の問題が明らかにされた。しかし、〈老い〉についての研究は、まだ端緒についたばかりである。〈老い〉は、誰にでも訪れるが、若い人や中年にとって〈老い〉は未知の国である。この未知の国〈老い〉には、まだ未発見の領域が多く残されている。文化としての〈老い〉の研究が、今後ますます発展することを期待したい。

註

本稿は、日本英文学会第 81 回大会（2009 年 5 月 31 日、於東京大学駒場キャンパス）での口頭発表に加筆・修正したものである。

- 1 フェミニスト・ジェロントロジーについては、Dian Garner 編集による論文集、*Fundamentals of Feminist Gerontology* を参照されたい。
- 2 生物学者による〈老い〉のパラダイム・シフトに関しては、トム・カークウッドの著書、『生命の持ち時間は決まっているのか』を参照されたい。
- 3 ウルフが *The Years* の構想を得たのは、日記によれば、1931 年 1 月 20 日の入浴中のことである。ウルフは、ヴィクトリア朝時代と 20 世紀の明らかな違いを、入浴の快適さから実感したのである。入浴は、些細な日常生活の 1 コマであるが、私たちの QL すなわち “Quality of Life” を左右する重要事項である。
- 4 Drabble says, “And there are stories which are built on cruelty. I remember the first time that I read *Miss Brill*. I was so horrified that I couldn't get it out of my mind: I think it changed something in me forever....” (135)
- 5 Showalter says, “There is something instructive and chilling in the survival tactics of this fiction. Writing about one of Mansfield's most famous stories, ‘Miss Brill’..., Margaret Drabble recalled that she had been horrified by its cruelty.” (247)
- 6 ミス・ブリルの狐の襟巻は、エレナのシャワー・バスと同様、ありふれた日常生活のアイテムであるが、些細な事柄から人生の深い真実に迫っていくアプローチは、モダニズム女性作家の得意とするところである。
- 7 エリク・エリクソンと妻ジョーンは、共に 90 才を超えるほどの長寿に恵まれ、多くの共著を残した。*The Life Cycle Completed* の初版は、1982 年、夫妻が 80 才の時に出版される。エリクは、1994 年、92 才で死去し、その後、ジョーンは一人で、ライフサイクルの第九段階（80 代、90 代）を書き加え、1997 年に *The Life Cycle Completed (Extended Version)* を出版する。ジョーンは増補版のまえがきに、次のように書いている。「私たちは 80 才になった頃、自分たちは老人になったということを初めて認識し始めたのだが、恐らく、90 才近くになるまで老年期の試練に直面することはなかったと思う。」

手塚裕子

Works Cited

- Bell, Quentin. *Virginia Woolf*. New York: Harcourt Brace, 1972.
- Drabble, Margaret. "Katherine Mansfield: Fifty Years On." *Harpers & Queen* July 1973, pp.106-107, 135.
- Erikson, Erik, and Joan Erikson. *The Life Cycle Completed (Extended Version)*. New York: Norton & Company, 1997.
- Friedan, Betty. *The Feminine Mystique*. 1963. Harmondsworth: Penguin Books, 1992.
- . *The Fountain of Age*. New York: Simon&Schuster, 1993.
- Garner, Dianne ed. *Fundamentals of Feminist Gerontology*. New York: the Haworth Press, 1999.
- Gutmann, David. *Reclaimed Powers: Toward a New Psychology of Men and Women in Later Life*. New York: Basic Books, Inc. 1987.
- Mansfield, Katherine. *The Collected Letters of Katherine Mansfield*. Ed. Vincent O'Sullivan & Margaret Scot. 5 vols. Oxford: Clarendon Press, 1984-2008.
- . *The Stories of Katherine Mansfield*. Ed. Antony Alpers. Auckland: Oxford Univ. Press, 1984.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own*. Princeton: Princeton Univ. Press, 1977.
- Tomalin, Claire. *Katherine Mansfield: A Secret Life*. New York: Alfred A.Knof, 1987.
- Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf*. Ed. Anne Oliver Bell. 5 vols. 1977-82. Harmondsworth: Penguin Books, 1983.
- . *The Years*. 1937. London: The Hogarth Press, 1979.
- シモーヌ・ド・ボーヴォワール, 『老い』, 朝吹三吉訳, 人文書院, 1972.
- トム・カークウッド, 『生命の持ち時間は決まっているのか—「使い捨てる体」老化理論が開く希望の地平』 (原書の初版は1999年), 小沢元彦訳, 三交社, 2002.
- カール・ユング, 『無意識の心理』, (原書の初版は1916年), 高橋義孝訳, 人文書院, 1977.